



移動の歴史の中東イスラム世界

(一社) 現代イスラム研究センター

理事長 宮田 律

中東イスラム世界のキャラバンサライの旅

概してイスラム世界の人々は人懐っこく、外来の者に親切な人が多い。アメリカで暮らしたことがあったが、欧米人は個人主義で、ともすると自分のことしか考えないのに、イスラム世界から来る人々は他人のことを思いやり、大変面倒見が良かった。酷暑の気候の中で人々が暮らすには互いに助け合いながら、生活せねばならない。よそから来た者たちをもてなそうとする姿勢は、砂漠の民たちの生活習慣なのかもしれない。中東イスラム世界の研究を始めて、その地域を旅行するようになった時、人々の気さくな表情や親切ぶりに驚くばかりだ。以下では移動の歴史から中東イスラム世界の「おもてなし」の心をひも解いてみたい。

移動によって形成された歴史

イスラム世界では陸路貿易が盛んに行われた。インドやエジプトやイラクでは海路輸送が活発だったが、しかしイスラム世界では大部分が陸路に、物資の輸送を依存せざるをえなかった。織物、セラミックス、貴金属やまた食料や香辛料、塩などは、遠く離れた地域に買い求めなければならなかった。キャラバンの規模は、ラクダ・ラバが総数で1,000頭を超えることもあった。都市のサライは、遠来の商人の宿泊場で、方形をしていて、中庭があり、商品の取引場、また商品の倉庫でもあった。

イスラム世界の歴史は移動の歴史で、ラクダやラバを使ったキャラバン交易が盛んに行われていた。キャラバンは、ラクダ、馬、ラバ、ロバなどの動物によって構成されていた。他方、インドのように、1台の車両を10頭から12頭の牛で引くところもあったが、ラクダは輸送能力にすぐれていたため、キャラバンに広く用いられた。しかし、ラクダの荷役能力も気候によって左右され、インドのように気候の暑い地域では、冬のイランのタブリーズや、トルコのイスタンブール周辺の3分の2の物資しか運搬できなかったと考えられている。

イスラム世界の中心にやってきたアラブや、非アラブのトルコ人やイラン人たちは遊牧民で、大規模な軍隊は常に移動を続け、また学生や学者たちは、著名な学問の師との出会いを求めて旅を続けた。また、都市の経済力や富は、交易品の流通の量や、商取引の行為の頻度によって決まった。アラビア半島のメッカやメディナなどイスラムの聖地を訪ねる宗教的な巡礼もムスリム（イスラム教徒）には旅を行う必要性があった。延々と続く砂漠の苛酷なまでに暑い気候や、一寸先も見えなくなる砂嵐など厳しい気象や地理的条件の中を旅行するために、ムスリムには、体を休めたり、水を求めたりする場所が必要で、また砂嵐や略奪者から身を護るための場も求められた。

そうした場所がキャラバンサライだった。キ

キャラバンサライの「キャラバン」は、ペルシア語の「カールヴァーン」で「隊商」を意味する。また、「サライ（ペルシア語の正しい発音はサライ）」は「家、建物、宮殿、宿」を意味する言葉である。「キャラバンサライ」のペルシア語の正しい発音は、「カールヴァーンサライ」となる。このキャラバンサライが必要だったほど、イスラム世界は、まさに移動の歴史だった。

特にトルコやイランでキャラバンサライが多いのは、これらの国が東西交易の中心に位置していたからだろう。トルコでは、キャラバンサライはトルコが東西交渉の要衝にあるという理由で古代から存在していた。さらに、セルジューク朝がアナトリアを征服後、キャラバンサライはそのネットワークをアナトリア全体に拡大させていき、その数はイランのそれを上回っていく。

イランのサファヴィー朝時代に建設されたサライの構造は長方形をしていて、また外側の部分には円筒形の塔がついているものが多いが、全く同一の形状をしているキャラバンサライは二つと存在しなかった。サファヴィー朝のキャラバンサライには、商店、パン屋、浴場がついているものもあった。また、内装は、モスクやマドラサを模したものも見られた。首都イスファハーンのキャラバンサライには、諸外国の外交官たちも宿泊したために、部屋のつくりを贅沢にする場合もあった。キャラバンサライの規模もそのルートの地理的条件によって変化せざるをえず、たとえば険しい山道にあるサライの規模は自ずと少人数の旅人を収容するようなものになった。

キャラバンサライは、20世紀初めまで建設された。オスマン帝国時代のように、ほとんどのキャラバンサライには、方形の中庭がある。キャラバンサライは主に隊商たちに宿を提供し、また物資を蓄える倉庫としても機能した。たいのキャラバンサライは2階建てで、1階は

筆者紹介

1955年山梨県甲府市生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科、カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (University of California, Los Angeles) 大学院修了。現代中東論、現代イスラーム研究専攻。一般社団法人「現代イスラーム研究センター」理事長。静岡県立大学国際関係学部准教授。著書に『中東危機のなかの日本外交』(NHKブックス)、『紛争の世界地図』(日経プレミア)、『南アジア 世界暴力の震源地』(光文社新書)、『イスラム世界おもしろ見聞録』(朝日新聞出版社)、『中東イスラーム民族史』(中公新書)、『現代イスラームの潮流』(集英社新書)など。

ラクダや馬を繋ぐ場所となり、商人たちは、2階の部屋で休憩をとった。2階に休息の場を求める構造は、商人たちの人身の安全のためにも必要だった。また、キャラバンサライの入り口が通例一つしかないのも、商人や物資の安全を確保するためのものだった。

キャラバンサライの建築様式は、長方形で、また石で造られた頑丈なものが多い。まるで小さな要塞のような印象を受けるが、その背景にはキャラバンの安全を図るという目的があった。簡易なテントでは、略奪者の攻撃を防ぐことはできないし、砂嵐からも身を護ることができない。キャラバンサライの建築は、移動の民の経験や知識から生まれたものだ。

特に、メッカへの巡礼となると、その人身の安全は宗教上の義務からも保障されなければならなかった。16世紀末にカイロからメッカへの巡礼に同行したイギリス人商人の記録では、メッカ巡礼の一行の数は、20万人にも膨れ上がるものもあった。このようなキャラバンには、水や食糧が与えられることはもちろんのこと、キャラバンにも法や秩序が提供されなければならなかった。このイギリス人商人は、このキャラバンには6門の大砲が備えられていることを明らかにしている。イスラム世界のキャラバンは、交易だけの機能を担っておらず、巡礼のためのキャラバンも数多く移動した。巡礼ルートで経済活動を行う商人たちは、キャラバンに対して

巡礼のための必需品や食糧を提供した。

キャラバンサライの間隔

1日にキャラバンが進めるほど道のりにキャラバンサライが造られていったが、それはおよそ6時間から9時間で踏破できる距離だった。イランの距離の単位は、「ファルサング」というもので、アラビア語では、「ファルサフ」と呼ばれている。キロで換算すれば、6キロぐらいとされるが、大体1時間歩いて進める距離だ。険しい山道になると、キャラバンサライの間隔も狭められ、20キロぐらいになる。水のないところにはキャラバンサライは造れないので、その間隔も一樣というわけではなかった。

隊商たちは、インドやペルシア湾、また紅海に荷揚げされた物資を地方の市場に提供した。また、イランのイスファハーン、ヤズド、ケルマーン、さらに中央アジアのサマルカンドやブハラなどはインドの諸都市とも交流があった。中央アジアの商人たちは、インドのムガル帝国に戦闘のために使う軍馬を提供した。またコブが二つある中央アジアのラクダ（＝フタコブラクダ）は、ゴビ砂漠やヒマラヤ山脈を越える際に使用された。

商業キャラバンによって、成立した都市も存在した。たとえば、イスラムが成立したメッカもまた経済的には商業キャラバンに依存するものだった。イスラム成立期にはおよそ1,000頭のラクダのキャラバンが中規模なもので見なされていた。バグダードからシリア北部のアレッポまでのキャラバンなどは比較的近距离であるために、大規模なキャラバンが組まれることはなく、500頭にも満たないラクダで構成されていた。

イラン、インド、トルコのキャラバン・ルート的重要性は、17世紀の半ばぐらいになると、次第に低下していった。というのも、イギリスやオランダの貿易会社が海路での交易を活発に

させたからだ。陸路では依然として絹は輸送されていたものの、香料は次第に海路での輸送にとって代わられていた。

隊商宿だったサライは、現在では廃れ、ほとんど機能していない。にもかかわらず、キャラバンサライは、シルクロードなどイスラム世界の人々の歴史的遺産として根強く記憶されている。中東イスラム世界を訪ねると、キャラバンサライの建物を利用したホテルやレストランをしばしば見かける。キャラバンサライを見ると、日本の東海道や中山道のように、いにしえの人々の移動にかけた意気込みや、旅の苦勞、さらにその生活ぶりに思いが寄せられるのかもしれない。

イスラム世界の隊商ルートにおけるキャラバンサライやバザールを通じて人々は商業や物流を行うことで、互いの文化を伝え合ってきた。特に陸路での巡礼や交易が活発に行われてきたイスラム世界では、隊商の活動や巡礼者の旅を支える存在としてサライの存在は大きかった。旅行者にとって、キャラバンサライがなければ、水や食糧の補給も、また休息も思うままにならなかった。また、周囲一帯が砂漠のキャラバン・ルートでは、強盗や泥棒などから身を守る場所も必要だった。一見、要塞のようなキャラバンサライは、漂泊と遊牧の民が生み出した生活の知恵といえるだろう。

隊商による交易

為政者たちは、国の経済発展を図るとともに、国家・社会の統合を図る上でも必要と考え、キャラバンサライの建設に力を入れた。また、キャラバン・ルートにある町では私的な宿が数多く建てられ、旅行者や商品を迎え入れた。また、商品など物資を保管するための倉庫も多くの場合、これらのキャラバンサライや宿にあった。中東においては、町にある小さな宿はトルコでは「ハーン」と、またアラブ世界では「フンド

ック」と呼ばれた。現在でもアラブ諸国を訪問すると、宿泊料金の安いホテルは「フンドック」として経営している。

キャラバンサライやハーンの中には現在でも実際に使用されているものもあり、イスラム世界のキャラバンサライの構造がいかにその社会に合った実用的で、機能的なものであったかを示している。気象条件の厳しいキャラバン・ルートは、風が強い場合は砂で隠れてしまう場合もあった。そのような時には、タクシーフと呼ばれる案内人がキャラバン・ルートの発見の役割を担った。キャラバンの中で最も多く死亡したのは、このタクシーフだったが、このようにイスラム世界のサライの旅はまさに命がけだった。中には嗅覚でキャラバンの行く先を探し示す視覚障害の案内人もいた。

イスラム世界の旅は、このような商売だけを目的とするものではなかった。メッカへの巡礼、学問を求める旅、またイスラム神秘主義教団のメンバーたちのように、巡礼と修行、また苦行を求めて行くものもあった。特にキャラバンサライが多くつくられたセルジューク朝時代には、宰相のニザーム・アル・ムルクが自らの名前から命名したニザーミーヤ学院を設立していたが、これらの学院での研究のための移動も活発に行われた。この学院は、スンナ派の神学や法学の研究や発展を目的とするもので、帝国内のバグダードや、ニーシャープール、ヘラート、イスファハーン、メルブなどに設立され、イスラム文化の発展に大きく貢献した。特にバグダードの学院はイスラム諸学の発展に大いに貢献して、多い時には学生数千人を集めていた。

また、イスラム神秘主義者たちは、神秘主義の聖人たちの廟などに巡礼を行った。イスラム神秘主義に関係のある宗教施設への巡礼は、メッカ巡礼に代わるものとされている。たとえば、神秘主義の聖人の廟への巡礼は、その周辺に住む者たちにとっては、近隣への巡礼であったた

めに、「貧乏人の巡礼」とも呼ばれていた。日本のお遍路のように、苦難の多い旅によって、ムスリムたちは信仰心を高めることもあっただろう。こうした宗教活動を目的とする旅の一行を保護することは、為政者にとっては、重要な政治的な、また宗教的な義務だった。

絨毯はイスラム世界の人々の生活必需品で、欠くことができないものだが、その絨毯も遊牧民が家内工業で生産したものなどが、イスラム世界の主要都市にキャラバンで運ばれた。バザールやサライで絨毯商人たちは、絨毯の品定めをしていた。絨毯がイランやトルコだけでなく、イスラム世界の周縁部分ともいえるモロッコやチュニジアでもつくられるのは、その技術がキャラバン・ルートやサライなどを通じて「輸出」されていったからである。他にもイスラム世界で共通する文化としては、お茶（チャイ）やコーヒーを飲む習慣がある。コーヒーは、キャラバン・ルートを通じて、イスラム世界各地や、さらにイスラム世界を越えてヨーロッパ諸国などに、輸出されていった。また、チャイを飲み、世間話をする習慣はイスラム世界各地で広がった。

19世紀以降、西欧のナショナリズムがもたらした国家システムは、中東イスラム世界に国境という人為的な垣根をつくり、人々の移動の自由を奪ってしまった。サライが20世紀になって減少していくのは、自動車や鉄道など西欧で生まれた交通手段の発達とともに、隊商貿易の自由を奪ったことにもよる。

移動の歴史とともに発達した天文学

天文学はイスラム世界で最も古く、かつ最も発展した学問分野だ。イスラム世界で天文学が発達したのは、神秘的な天体に強い関心があったことや、また夜に移動する遊牧民の生活上の必要に迫られたこともあるだろう。バビロニア人、ギリシア人、インド人も単に経験による天体の

観測以上の天文学ともいえる科学をもっていた。

アラブ世界で天文学が発展したのは、9世紀の初めから16世紀にかけてのことである。イスラムの天文学者たちは、实际的で、理論的な天文学を構築していった。天文学者たちは、多くの研究者を著し、観測所をつくり、また新しい観測を行っていった。天文学は占星術とは異なるが、占星術も天文学的知識を発展させる基礎となっていたことは確かだ。天文学的研究も、占星術で正確に運命を予測したいという動機が背景となっていた。しかし、多くの天文学に関する研究書が著されたものの、占星術に関するものはあまり多くはなかった。宮廷において天文学者は、占星術師としても活動したが、占星術を蔑む傾向もあった。

最初の天文学書は、8世紀にインドやペルシアのテキストからアラビア語に翻訳された。8世紀後半にムハンマド・イブン・イブラーヒム・アル・ファラズイー（777年没）とヤクープ・イブン・ターリクが8世紀のインドの天文学書をアラビア語に翻訳する。そのインドの天文学書は「ズィジュ・アル・スィンドヒンド」というもので、ハンドブック的な天文学書だったが、アッバース朝のカリフ、アル・マンスール時代に、宮廷を訪れたインド人天文学者の監督の下に翻訳が行われた。

このようにアラブの天文学者たちは、最初はインドやペルシアの天文学の影響を受けたが、アラブ人たちに深遠な影響を及ぼしたのは、ギリシアの天文学だった。9世紀のアラブの天文学者たちは、ギリシアの天文学はペルシアやインドのものより包括的で、有効に幾何学的な説明という点においてはるかに優れていることに気づく。特にアラブの天文学者たちが関心をもったのはプトレマイオスの天文学で、彼の著書の『アルマゲスト』は、中世アラブ世界を通じて影響力をもった。プトレマイオスの天文学は

ギリシアの幾何学的天文学の最高傑作の一つといえる。アラブ世界では『アルマゲスト』の翻訳には四つのヴァージョンがある。最初のものには、9世紀前半のアル・ハッジヤージュ・イブン・マタルのもので、二番目のものはイシャークが翻訳した。この翻訳は、アラビア語の科学用語の使用において優れていることを表している。

アラブ人の最初の天文学の業績はアル・フワーリズミーによるもので、『ズィジュ・アル・スィンドヒンド』というタイトルであった。この業績には太陽、月、5つの惑星の動きに関するチャートがあり、これらをいかに用いるかという説明も行われていた。フワーリズミーの天文学はインドのそれを主に起源とするものだったが、プトレマイオスの説にも拠っていた。

アッバース朝のカリフのアル・マアムーン時代に天文学の観測は、宮廷の支援もあってバグダードやダマスカスで盛んに行われた。この活動は天文学の研究に一種の権威を与えるものだった。さらに、アッバース朝の姿勢は後世のイスラム世界の支配者たちが、学問研究に支援を与える手本ともなった。この時代の研究はプトレマイオスの研究に基づきながらも、天体を実際にバグダードやダマスカスで観測することによって、計算による結果と比較し、プトレマイオスの理論を確認するものだった。

数学もまたイスラムたちが著しい貢献をした分野として知られる。アル・フワーリズミーの「キターブ・アル・ジャブル・ワル・ムカバラ（数学の書として知られる。字義通りには強制と比較の書）」は9世紀初めに書かれた。この業績は数学の歴史において最も顕著なものとしてされている。その業績によって、アラブ世界で数学の研究が盛んになる。10世紀と11世紀にアブ・バクル・ムハンマド・アル・カラジは、数学を代数学に発展させる試みを行った。9世紀後半にアラブの科学者のクスタ・イブン・ルカ・アル・

バラバッキーは、ディオファントゥスの『アリスメティカ』をアラビア語に翻訳した。そのアラビア語のタイトルは『代数学の技術』というものだった。

移動とイスラムの人々との付き合い

イスラムの預言者、また教祖であるムハンマド（マホメット）も、アラビア半島を隊商の執事として移動している間に、ユダヤ教やキリスト教など一神教の教義に接した。このムハンマドの「移動」がイスラムという宗教を誕生させることになったことは間違いない。

イスラム世界は東西交通の中心に位置し、ヨーロッパやアジアからの人々との交流が途絶えることがなかった。また、イスラムは相互扶

助を唱える宗教だ。外来の異教徒にも親切なムスリムの行動は、そうしたイスラムの教義にもよるものだろう。ムスリムたちの絶え間ない笑顔を見れば、こちらも心を開かざるをえない気分になってくる。「アッサラーム・アレイクム（あなたの上に平安あれ）」とって抱き合うムスリムの挨拶には、「あなた元気ですか」「ご家族にお変わりありませんか」など多くの感情が込められている。

イスラム社会の特質、宗教、あるいは文化、さらには気質を見たり、考えたりする上で、またイスラム世界の人々と付き合う上で、この「移動」の伝統や歴史は当然考慮に入れなければならないだろう。